

HOW TO MAKE

織物ができるまでを簡単に紹介します。詳細を知りたい方は「ハタオリマチのハタ印 (<http://hatajirushi.jp>)」をご覧ください



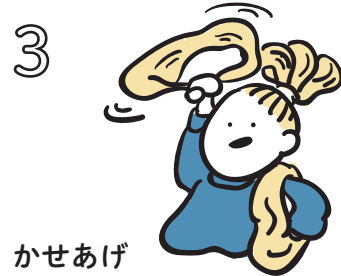
デザイン

織物の柄だけでなく、糸の本数、密度などを決めます。昔は手描きでしたが現在はコンピュータを利用することも。



撚糸（ねんし）

よりをかけることで、頑丈な糸になります。髪の毛より細い絹糸でも、この作業のおかげで丈夫な織物になります。



かせあげ

よりをかけた糸に染色する準備をします。専用の機械に糸を取り付けてくるくると巻いてかせという糸の束を作ります。



染色

かせにした糸の束を染色機という、大きな圧力鍋のような機械に入れて色をつけます。



繰返し

染色した糸を織る準備をします。染色するために糸を束にしたので、束からポビンへと巻き直します。



整経

織物はタテとヨコの糸の交差でできています。おまきという大きな芯に、織る準備が整ったタテの糸を巻きつけます。



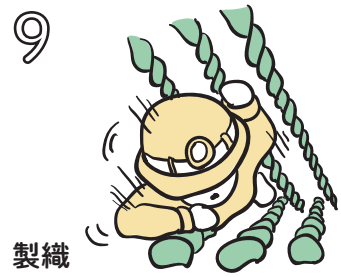
よりつけ

織機にはこれまで使っていた糸が取り付けられたままなので、これに新しく使う糸を繫げます。



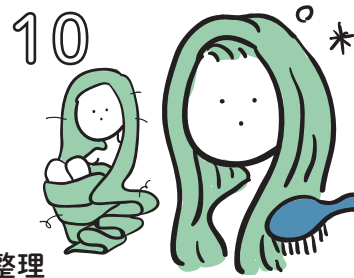
紋紙をセット

織物の模様を作り出す紋紙を機械に取り付けます。現在は電子データで指示を出す機械もあります。



製織

機械には縦の糸が上下にセットされます。その糸の間に横の糸を滑り込ませ、生地を織っていきます。



整理

織りあがった布を洗ったり、シワを伸ばしたり売り物にするためにきれいにします。撥水など特殊な加工をすることも。



検反

仕上がった生地に傷や汚れがないかチェックします。小さな傷は職人さんが修復します。



12 完成



ちいさな工場が受け継ぐ千年の歴史

山梨県南都留郡、北都留郡一帯を郡内地方と呼んでいます。大月市もその一部。平安時代の延喜式にこの地域で織物がつくられていたことがわかる一文が記されています。郡内では千年前から織物が栄えていたのです。太古の伝統は今も町のちいさな機屋さんに受け継がれています。

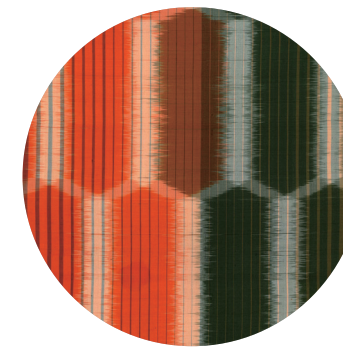
1 gunnai



“ぐんない”のこと

郡内織物は郡内地方でつくられる織物のことです。“ぐんない”は山や森が多く、水のきれいな地域です。クワの木がよく育つことから、蚕を飼育して生糸をつくる養蚕業が栄えました。織物産地であると同時に絹糸の産地でもあったのです。

2 kaiki



甲斐絹

江戸時代にうまれた甲斐絹という織物の技術が郡内織物に継承されています。当時とても扱いづらいとされた絹糸の無撚糸を織り上げる技術は今でも高度な手法と言われます。高い技術力は素材を選ばず、どんな糸も上質な織物に仕上げてくれます。

3 factory



ちいさな工場

郡内織物をつくる機屋さんは家族経営ならではの小ロット生産が特徴です。ちいさな工場で職人さんがコツコツと織物を織り上げています。上質なクオリティと手づくりのようなあじわいは職人さんが直接つくっているからできるものでした。